

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-5

真紀自身、学術的に論じるつもりなどさらさらないが、画家の前で裸になる覚悟ができた別の要因として、マネの『オランピア』や『草上の朝食』を契機に変遷しながら十九世紀後半にヌードが芸術として社会から受容されていった流れに逆らうかのように、昨今の現代絵画に傾倒している美術評論家と称される人種の多くが、ヌードと言う明快な主題から乖離して、表現方法さえ解体されてしまったピカソやマチス以降の楽しむよりは考える裸婦画を偏重する向きに真紀は違和感を覚えていたので、横田が真紀の裸体画を描きたいと口に出したときに、ゴヤの『裸のマハ』にも比肩するほどの日本画の裸婦像を描きたいと熱く語ったことが挙げられる。

描画作業に入る前の何かの折に、真紀と横田の間でピカソの『横たわる裸婦』が話題になったことがあり、「あの作品は肖像画を静物画にしてしまっている。確かに普遍的ではあるが客観性に欠けている」と横田らしい批評を聞かされた時も、ヌードになる自分が間違っていない事に真紀は確信を深めることができた。

上野のアトリエで、完成した二点の裸婦画と対面した際に、真紀は自分が被写体であることさえ見まがうほどの造形美に名状しがたい高揚感に包まれた。

至福の時間の余韻を道ずれに、完成祝いを兼ねた越前への小旅行は、真紀にとって疎外感と心惑いを連れ帰るといふ想定外の結果になってしまった。

晩秋の月曜日に降る雨は、快適な室内環境に居ても訳もなく気が滅入る。一時過ぎに携帯電話が鳴った。横田からだった。

「昼飯はまだかな？」と横田は言った。旅疲れへのねぎらいの言葉はなかったが、その声には気遣いがうかがえた。

今の真紀には一番聞きたくない声であったし、聞きたい声でもあった。

「お疲れではないですか？」と真紀は嫌味を悟られないように自然な感じで尋ねた。

「いや。運転はあなたお任せだったし、目的も十二分に果たせたからね」

「アトリエですか？」

「ああ。……さっきまで、画商の朝倉君がいたんだ。紹介はまだだったね」

「お名前も初めてお聞きしました」と何を今更と思いながら、それでも平静を装って真紀は答えた。